

第八回 最初の竹山の日々(一)

十月十七日ようやく建物が完成し引き渡しとなった。その前の確認検査では外壁の板に大きく欠けた部分が見つかり、なんとという工事の仕方かと腹がたつたが、あとでご近所に聞くとキツツキの作業だったとわかった。向こうにしてみればナワバリに断りもなくつくられた大きな箱を調べてみたということなのだ。飛んだとぼちちりを受けた工事業者さんには申し訳なかった。引き渡し後に、新築特有の匂いを避けて換気のために窓を開放していたら、突然、一羽の小鳥が部屋に飛び込んできて大騒ぎになった。幸い壁に激突することもなく無事に外に戻って行ったが、確実に彼らの世界に侵入したのはこちらだと実感させられた。

このほかに完成までは色々あったが、それはおいておこう。とにかく完成したのだ。

ただ、やることはいろいろあつて、まずしなければいけなかったのは、フロアリングのワックスがけだった。とにかく工費費用を切り詰め自分たちでできることはやるという方針だったので、がらんとした部屋に買ったばかりの布団を敷いて、三日がかりの仕事になった。

ダイニングテーブル作り、カーテンレールの取り付けなど細々としたことがあるいろいろあり、それらはみな週末作業だったので、なんとか落ち着いたのは一ヶ月半後ぐらいであった。

もう十二月も半ばになり、そろそろ雪の季節かと思つていたらドカンと来た。S市の街中も結構積もつていたが、除雪が行き届いていて車は動かせたので、週末は竹山でと来て見ると六十センチの積雪で、幹線道路から家に行く道はとも車で行くことができない。隣家の友人宅に車を置かせてもらつて、家まではパウダースノーをラッセルしながらようやくたどり着くことができた。翌日は晴れて時々雪が降る程度に収まったが、とにかくやらなければならぬのは雪かきだ。

だが、とにかく広い。悪戦苦闘していると見かねた隣の見知らぬ方が小型のユンボで助けてくれた。このSさんかなりの高齢とお見受けした。住人ではないのだが、長らくここで働いていて昔のことも詳しく、あとあといろいろなことを教えてくれることになる。

幹線道路から家までの二百メートルの道の除雪まではさすがに手がでなかつたが、ここは、隣近所で除雪組合をつくつていて、市から除雪のための補助をいただき自分達で除雪業者をお願いする仕組みになっていた。さっそく組合に入れていただき。ほどなく、大型の除雪車がやってきてくれてなんとか車も動かすことができるようになった。

十日後に竹山に来た時も、また車が雪で立ち往生してしまった。これでは来年早々に四駆の車に買い換えなければならない。

また、お金がかかる。

そんな感じて最初の竹山の日々は始まった。



第九回 最初の竹山の日々(二)

そんな竹山の日々は、たいへんなことばかりではなかった。

当初の作業小屋のイメージが残っているのは、玄関から入ってすぐの八畳ほどの土間だけだが、そこに薪ストーブをおいた。それもオーブン付きで料理ができる。窯開きは十二月三十日で丸鶏と芋を焼いてみたが、これがなんとも程よい火の通り具合で美味しかった。窓から外を見ると木々の枝ひとつひとつに新雪がのり一面真っ白な世界が広がる。土間には薪ストーブの炎がオレンジ色の光をゆらゆらと落とす。そんな風景に浸りながらワインと鶏肉を味わう時間がゆっくり流れる。

翌日の大晦日には、くるみ入りのパンを焼き、またワインをおともに豚肉のソテーと野菜を煮込んだスープで、はじめての竹山での年越しをした。

年が明けてもすぐ帰る気にはならず、長めの正月休みをとって九日まで竹山にすることにした。

年末から雪混じりの日が続いてきたが、二日になってようやく暖かな日差しが訪れた。それを待っていたかのように小鳥があちこちの枝を行き来しはじめ、雪原をエゾリスが横断するのを目にすることができた。小鳥たちはせわしなく飛び回るので、その種類を見分けることは難しかったが買ったばかりの鳥類図鑑と双眼鏡を駆使して、コガラとカケスとアカゲラは何とかわかった。今から見るとコガラとしたのはハシブトガラではなかったかと思うが、まあ、そのような間違えはその後山のようにある。

鳥はまだまだだが、木となるとさっぱりである。これは絶対に間違いないと言いつけるのはシラカバぐらいで、あとは、小さな木と大きな木ぐらいの見分けしかできない。私でもわかる木は庭木か街路樹に使われる木で、そのような木はほとんど見かけないのだ。それに、葉を落とした冬であればなおさらであった。それでも、風が通り道にあたった枝からサラサラとした雪の小さな雪崩が舞い散る姿は見ていて飽きなかった。それはまるで誰かがいたずらして枝をゆすって雪を舞わせているようで、それも気まぐれに、あちらの枝、こちらの枝と目の前の雪原を遊び歩いているようだった。

風といえば、北風なら北風で、一方向から吹き続けるイメージがあったが、ここではそうではない。まるで意思をもった生き物のように不連続に動き回るのである。これが春になって草木に葉が繁ようになるともっと不思議な風に出会える。本当にひとつの葉っぱだけが、まるで手を振っているように激しく動くのである。他の葉は微動だにしないのに。

朝起きて雪原を見ると、家の近くまで動物の足跡が残っていることもあった。当時は足跡で誰が来たのかなんてわかるはずもなかったが、足跡を見ただけでちよっと興奮していたのを思い出す。

近くのゴミステーションといっても家からは五百メートル離れていてそれも坂道なのだが、買ったばかりのソリにゴミをのせて、帰りには自分たちが乗って滑り降りる。そんなことをしていたらあっという間に帰るときになった。



第十回 最初の竹山の日々(三)

次に竹山に来れることができたのは、ほぼ二週間後であった。

道路や家の周辺の雪は十センチほどで除雪はそれほど大変ではなかったが、今度は寒さだった。翌朝の最低気温はマイナス十八度で、そこまできると普段は賑やかな小鳥たちの姿もほとんど見られず、シジュウカラが二羽来たぐらいでシンとして凍りついた静かな風景だった。

S市のまちなかではあまり記憶にない寒さだと思っていたら、二日後の朝にはマイナス二十一度まで下がった。晴れた日の朝は、放射冷却現象とかで気温がグッと下がるのだ。

そのかわり、厳寒の快晴の朝空はどこまでも透き通り、遠くの山並みが朝日を浴びてくつきりと普段より大きく見渡すことができた。

あまりの寒さに怖気付いたわけではないが、次に竹山に来れたのは翌月の半ば過ぎで、三週間以上たつてからであった。冬場、それだけ家を空けているとすっかり冷え切ってしまったてなかなか暖まらない。ようやく家が暖まったのは二日後だった。その日は朝から快晴で、部屋の中に陽が低い角度で差し込みそれが家を暖めてくれた。天気が良いとお客さんも賑やかだ。大きな窓の前をキタキツネが悠然と横切っていた。普通、人の気配を感じ取るとサツといなくなりそうなものだが、ちらつとこちらを見てもまるで何も見なかったようにゆっくり堂々と歩いて立ち去っていった。まあ、こちらの主はそつちななかから当然か。その日は、アカゲラとシマネガが同時に居合わせたりするのも目にすることができた。

私たちも、天気の良いさに誘われえて隣家の友人から新居祝いにいただいたスノーシューを履き初めすることにした。敷地内をぐるっと一周するくらいだが、それでも結構汗ばみ身体が暖まる。よく見ると、斜面の雪が溶け落ちて土が少し顔を出しているところがあった。本格的な雪解けはまだ一ヶ月以上先になるが、それでも少しずつ季節が変わりつつあるようだ。前回来た一月でいえば元旦の日の出が午前七時三分で、日没が午後四時十二分で、太陽の南中高度も二十四度と低かったのだが、この二月十八日では、日の出が午前六時二十六分で、日没が午後五時一分と太陽が出ている時間がかかなり長くなったし、南中の高度も三十五度と高くなっている。一年の半分近くを雪と寒さに閉じ込められる地域にとっては、そのようなわずかな差でも、また、春に一步一步近づいていると気持ち膨らむものなのだ。

もちろんS市のまちなかにいても、太陽の光が力強さを増しているのを感じられるのだが、竹山に居るとそのことが、生き物たちの動きや場所による雪の融け方などかすかなことからからも感じられる気がした。

そんなことを感じることもできた二月だったが、結局、竹山に来ることができたのはその四日間だけだった。一月は正月休みを長く取れたので十二日ほど居れたのだが、二月は年度末が近いせいか出張が多く十一日間それに取られてしまったのだ。



当初の構想は、週末の息抜きに野遊びができる土地を手に入れ、小さな作業小屋もつくって外を眺めながらお茶を楽しむことができればという程度のことだったのだが。どこでどう魔が差したのか。いつのまにか最後の蓄えを使い果たしてまっとうな住宅を建ててしまった。

そうならなかったで週末だけではもったいない。できるだけ長く竹山に居たいと言う気持ちが大きくなつたわけだ。実際問題として、厳寒期などは週末に訪れても除雪にかかる時間はけっこうなもので、また、冷え切った部屋が暖かくなるのを待つだけで貴重な一日が過ぎてしまう。そして、ようやく落ち着いたと思ったらもう帰り支度をしなければならぬ。

確かに竹山のこの土地は、ちょっと野遊びで訪れるというのではなく、しっかり腰をすえて日々の風景に目を向ける余裕がないと味わえない魅力があるのは事実だ。

できるだけ竹山に滞在する時間を長くしたくて、竹山オフィスの日というのを勝手に決めることにした。そうすると出張に向くにしても、S市の自宅より高速道路や空港へのアクセスが便利で合理的でもあった。出張の帰りもまちなかのマンションに戻るより、静かで清涼な空気と暗くなりかけた空に木々の黒いシルエツトが浮かび上がる景色が出迎えてくれるほうが疲れが癒えた。

ただ、良いこともあればそうでないこともある。

竹山にはラフで自由な服装でいきたいのだが、その足で出張となるとそれなりの服装を持参しなければならぬ。竹山にお気に入りのジャケットを置いておくことにしたら、今度はS市に居るときにそのジャケットがないので慌てることになる。それに着替えの問題もある。

妻は食材の問題に頭を悩ませていた。食べるだけのこちらにはわからないが、その時の滞在日数に合わせて食べられる食材をキープし、自宅のマンションの冷蔵庫の管理もするのは相当苦労したようだ。フードロスに敏感であればなおさらである。

いわゆる二地域居住の部類に入るのであるがどうも違うようだ。夏の間はこちらで、冬になればあちらでというようなスパンで滞在できれば違うのかも知れないが、一週間の間であちらとこちらというのでは、あまりに慌ただしすぎる。それに三、四日の出張が加われば短期三地域居住の状態になってしまう。その合間に竹山でしか味わえない生活をと欲を出そうものなら忙しいことこのうえない。何か田舎暮らし的なことをしたいと思って竹山に居るわけではないが、時間に追われると、ついあれこれしちゃう。

ゆったりとした時間を楽しもうと思っていたのが、かえってあわただしくしてしまっている。完全に目的としたこととやっていることが逆転してしまっている。

そう気づいたときに訪れたのは三十五年経営して来た会社を後人に譲るという事業だった。

